最終報告書レポート

2019 年 11 月 13 日
柿塚拓真

21 世紀のアジアのオーケストラのアイデンティティ確立のための相互交流とネットワーキング

1. 活動概要

一定の歴史があり、更なる成長をとげる王立バンコク交響楽団と、本格的な活動が始動したばかりで、手探りで自らの在り方を探る国立ミャンマー交響楽団を訪問し、その活動や関係者、それぞれの置かれている文化的、歴史的背景を取材。また日本のオーケストラのヴィジョンや課題を共有することで、21 世紀のアジアのオーケストラの存在価値や活動の在り方について相互交流を深め、具体的な活動へ向けての起点を築いた。またタイ・バンコクでは複数のオーケストラや音楽学部を持つ大学が併存しており、一定の聴衆も存在しておりヨーロッパやアメリカと違うアジアの大都市でどのようにクラシック音楽文化が発展しているのかを知り、日本でのオーケストラ活動にも大いに参考になった。さらには音楽と社会、教育的、福祉的な活動がリンクしたものもあり、世界的に広がりつつある芸術の社会的な側面を改めて捉え直し、それを目的にバンコクの社会的な問題に深く関連した独自の活動についても知ることができた。

2. 各受入機関の紹介と取り組み

① ミャンマー国立交響楽団（MNSO）

MNSO へは 2013 年に音楽家の山本祐ノ介氏（指揮者、チェロ奏者、作曲家）と共演し、その後、山本氏は音楽監督に就任し同楽団の音楽性と技術の向上に尽力。また同じく小山京子氏（ピアニスト）がミュージック・アドヴァイザーを務めている。特に 2014 年度から 2018 年度までの 5 年間は日本の国際交流基金が助成事業や共催事業として音楽面、技術面の指導の他、オーケストラ運営の技術的な基礎となる楽譜の管理、楽器の修繕など包括的におこなった。また ODA での楽器購入や山本氏の関係者による個人的な寄付による楽器の提供が日本より行われている。今回は山本、小山氏、そして MNSO 事務局のウィン・ミン・ピョコ氏が私の訪問を受け入れてくれた。

MNSO では主に、山本祐ノ介氏、小山京子氏によるオーケストラリハーサルの視察、MNSO 楽団員だけの練習の視察、MNSO の運営について事務局へのヒアリングを実施した。

ミャンマー国営ラジオ、テレビ局ヤンゴン支局内にある MNSO 事務所

② 王立バンコク交響楽団（RBSO）

RBSO は 1982 年にバンコク交響楽団の名前で創立されたタイの民間オーケストラとしては最も長い歴史をもつ団体である。シンフォニーコンサートの他、オペラ、バレエ、ポップスなども演奏。活動の中心はタイ文化省が管理するタイ文化センター。楽団員はメンバーとして登録がされてはいるがフルタイム契約でなく出演の出番毎に出演料が支払われており、普段は音楽大学の講師、国立交響楽団や陸海空軍のオーケストラ等に所属して演奏活動をしている。2016 年 11 月にタイ王室よりロイヤル（王立）を名乗ることを認められ、2018 年よりプリンセス・シリヴァナヴァリ・ナリラタナ・ラジャカンヤ（現国王の娘）のパトロネージュを受けている。この沿革を見ても分かるようにロイヤルと名乗ってはいるが民営のオーケストラである。2018 年 3 月よりベルギーの指揮者ミッシェル・テルキンが音楽監督を務める。

今回はジェネラル・マネージャーのワンチャイ・ヤン・ウボン氏が受入先となり RBSO のコンサート、リハーサル、打ち合わせの立ち合い、ヒアリングなど楽団の活動全般を視察した。

RBSO 事務局の皆さんと事務所にて

※背景の写真の女性がパトロンのプリンセス・シリヴァナヴァリ・ナリラタナ・ラジャカンヤ

本拠地であるタイ文化センターメインホールでリハーサルをする RBSO

3.　フェローシップ活動記録

I.　ミャンマー国立交響楽団（MNSO）

①　山本祐ノ介氏、小山京子氏による MNSO リハーサル

山本氏、小山氏によるリハーサルのうち 7 月 18 日、20 日、22 日、23 日、24 日（午前中のみ）の 5 日間を視察した。リハーサルは原則 10:00～12:30、13:30～16:00 に実施され、これは MNSO 楽団員の勤務時間と一緒である。今回は今年度末に実施するコンサートに向けたリハーサルで交響曲第 9 番「新世界より」（ドヴォルザーク）、威風堂々第 1 番（エルガー）、ラプソディ・インブルー（ガーシュイン）を採り上げた。また今回は山本氏、小山氏以外に久一忠之氏（ティンパニ＆打楽器奏者）、杉本哲也氏（ライブラリアン）、加藤雅元氏（コーディネーター、オーボエ指導）も指導に加わった。MNSO の演奏技術はプロフェッショナルな音楽団体という意味では発展途上中である。楽譜を正確に読めない楽団員、正確に音が並ばない楽団員など技術的な面を言い出したらキリがない。しかし、幼少期に教育を受けた楽器でもなく、楽団創立から約 10 年間主だった活動をしていなかった大人の楽団員が 5 年余りでこの段階まで来たということは驚くべき変化である。またリハーサル中に時々いい響きがしたり、作品の持っている世界が素直に表現されたり、その場にいる楽団員が同じ音の渦の中にいるような、いい意味でオーケストラらしい瞬間があった。このことはこのオーケストラが活動を続けるにあたって非常に重要な点だと思う。これは山本氏、小山氏が技術指導に留まらず、最初から MNSO の楽団員をプロの音楽家として扱い、音楽的な要求を続けているからである。そうするとリハーサルが重なるにつれ楽団員の方から自ずと自身が持っている音楽が引き出されて、指導と訓練ではない「音楽創り」が発生しているように感じられた。このことは山本氏、小山氏が単なる指導者でなく音楽家であり、その彼らが真剣に MNSO に向かい合っているからに他ならないだろう。実際に山本氏へのヒアリングでも、「少しでも音楽を共有して、音楽は楽しいということを MNSO の楽団員が感じてくれれば、それが 10 年後、20 年後にミャンマーのクラシック音楽の発展に貢献するだろうし、ミャンマーの国立交響楽団のアイデンティティ確立に繋がるだろう」と語ってくれた。

山本氏によるリハーサル

久一氏による打楽器の指導

② MNSO 楽団員だけの練習

7 月 29 日（月）には MNSO 楽団員だけの練習を視察した。事務局のピョコ氏によると月、水、金は個人練習、火、木はセクション練習、合奏練習に原則当てている。この日は月曜日ではあったが弦楽器、打楽器は個人練習、管楽器はセクション練習にあたっていた。この管楽器のセクション練習では 2 番ファゴット奏者が中心になり進め、新世界交響曲の第 3 楽章を採り上げていた。楽譜が正確に表現できなかったり、テンポが変化する箇所、音を合わせるタイミングがずれる箇所を調整する練習だった。それは演奏できるもの、楽譜が読める者が出来ない者に口伝でリズムやタイミングを伝える、できない箇所はできるまで繰り返す、まるで伝統音楽の稽古のような印象を受けた。実はその時に何故この様な練習の仕方なのか疑問に思ったのだが、実際にその後、私はサウン（竪琴）のレッスンを音楽教室などで体験し、同じようにレッスンが進んだので合点がいったのだ。その点から言うとこのセクション練習や個人練習をさらに効率よく精度を高めていくには①メトロノームの導入②できない箇所はゆっくりのテンポでじっくり向き合う③YouTube、Spotify などの音源を活用し音を知り、またその音と楽譜の見た目を頭の中で一致させる。ことが有効かもしれない。しかし、このように楽団員が中心になってセクション練習をすることは MNSO の技術向上そして自主的な音楽活動に繋がるため、この仕組みの充実、進め方の精度の向上、中心となる楽団員や指導者の育成が今後の MNSO のキーポイントになると思う。しかし、練習中よく間違うし、何度も繰り返すし、間違っては次第に大きな声で指摘されるのだけれど、笑顔で楽しそうに進めていることが印象的だった。

MNSO 楽団員のみの練習

団内オーディションに向けてアドバイスをする山本氏

③ MNSO の運営についてのヒアリング

事務局ピョコ氏に MNSO の運営についてヒアリングをした。そこから感じた運営面の課題は以下の通り。

- 国営ラジオテレビ放送の中の音楽部門の 1 部署であり楽団独自の予算という考え方がないが、可能な限り楽団独自の収入、収入源を確保する。それが可能な時期に向けて今から準備していく。
- 楽団のマネジメントと放送局のマネジメントが音楽番組の制作、放送プログラムへの音楽提供などの事業について計画を持って話し合う機会をつくる。
- 楽団員の給与の低さ、また楽団員毎に複数の雇用契約があり同じ業務でも待遇が違うという不健全な状況を改善する。
- 山本氏、小山氏などの外部の指導者への予算を確保する。
- 楽団内部の指導者、リーダーとなる楽団員を充実させる。
- 外部の音楽機関、教育機関との演奏家や作曲家との交流、人材活用を進める。
- 演奏家、作曲家だけでなく MNSO 外部との交流を進め活動機会についても聴衆の考え方についても外部の意見を取り入れる。
- MNSO としての演奏機会を増やす。
  ※現状は年度末にヤンゴンと他 1、2 都市での公演のみ。

このいずれもが MNSO が国営ラジオテレビ放送の一部署という制度的な問題に起因することでもあるので、一朝一夕には解決しないことは百も承知である。しかし今からこのことを意識すると 5 年後、10 年後に MNSO に大きな変化が起こると思うのでここに示しておきたい。

山本氏に賛同して日本にて集められた楽器が MNSO に寄贈された。
※左は国営放送幹部職員

II. 王立バンコク交響楽団（RBSO）リハーサル、コンサート視察
滞在中に RBSO の主催する以下のコンサートとそのリハーサルを視察した

日程	会場	公演名	指揮者	ソリスト	プログラム
8月22日(木)	タイ文化センター メインホール	Romantic Piano Celebration for the Queen Mother	川本貢司	ピアノ、Severin von Eckardstein	メンデルスゾーン:序曲「フィンガルの洞窟」 グリーグ:ピアノ協奏曲イ短調 シューマン:交響曲第1番「春」変ロ長調
9月1日(日)	タイ文化センター 小ホール	RBSO Classical Concert No.4	新通英洋	ピッコロ、Kalaya Pongsathorn (RBSOフルート奏者)	ヴィラ=ロボス:ブラジル風バッハ第9番 ヴィヴァルディ:ピッコロ協奏曲ハ長調 ヴォーン・ウィリアムズ:トマス・タリスの主題による幻想曲 メンデルスゾーン:弦楽交響曲第11番ヘ長調
9月6日(金)	タイ文化センター メインホール	Hungarian Rhapsody - German Pasison	Charles Olivieri-Munroe	ピアノ、Katharina Treutler	リスト(カール・ミュラー=ベルクハウス編):ハンガリー狂詩曲第2番ハ短調 クララ・シューマン:ピアノ協奏曲イ短調 ロベルト・シューマン:序奏とアレグロ・アパッショナート リスト:交響詩「レ・プレリュード」

①　プログラムについて

プログラムは音楽監督であるミッシェル・テルキンとジェネラル・マネージャーのワンチャイ・ヤン・ウボンが構成し、公演毎に個々の指揮者が意見を出しながら構成される。上記を見ても分かるように十分に面白い、興味深いプログラミングであり東京や大阪あるいはヨーロッパの都市のオーケストラと比較しても何の遜色もない内容であり、オーケストラとして幅広いレパートリーに取り組んでいることが分かる。

②リハーサルについて

メインホールでのコンサート（日本で言うところの定期演奏会）に向けては 18:00～21:00 の 3 時間のリハーサルを 3 日間、夕食休憩を挟んだ 14:00～21:00 の 6 時間のリハーサルを 1 日、本番直前の会場でのサウンドチェック 1 時間を確保している。会場は最初の 3 日間は国立チュラロンコン大学音楽学部のオーケストラスタジオを使用、4 日目よりコンサート会場と同じタイ文化センター大ホールを使用する。また小ホールでの Classical Concert（小編成のオーケストラコンサート）に向けては 18:00～21:00 の 3 時間のリハーサルを 3 日間そして当日会場でのリハーサル（ゲネプロ）を実施。リハーサルの会場は同じくチュラロンコン大学を使用することもあるが、今回は事務局に隣接する楽団直営の音楽教室 RBSS School の大教室で行われた。十分な時間を確保しているように見えるが楽団員の雇用形態から毎回同じ奏者が揃う訳ではないこと、多様なプログラム、オーケストラの多忙さから考えると不足はないが余分という感覚はない。

チュラロンコン大学でのリハーサル

RBSS School 教室でのリハーサル

III. RBSO の他の公演活動について

Ⅱ.でのコンサートに加え滞在中に RBSO は以下の公演活動を行っていた。

日程	会場	内容
9月28日（水）	マンダリンオリエンタルホテル	銀行の顧客向けパーティでの演奏
9月7日（土）	プラザアテネホテル	製薬会社の顧客向けパーティでの演奏
9月12日（金）	グランドハイアットエラワン	若手ビジネスリーダーを対象とした指揮者と楽団員の関係性からリーダーシップとコミュニケーションを学ぶワークショップ

これらの公演では主催者、コーディネーターが別に存在し RBSO は演奏の提供に対し参加料やチケット収入ではなく出演料をもらう仕組みで日本のオーケストラで言う依頼公演にあたる。これらの公演ではかなり柔軟に楽団員の選定、招集をおこなっており、オーディションを経て世代交代が進んだ年配の楽団員の演奏の機会の提供になっている側面もある。また 10 月、11 月には国際的な芸術祭 Bangkok Festival にてバレエ公演、テノール歌手ホセ・カレーラスのコンサートにも出演を依頼されており、このようにオーケストラの演奏に対し一定の需要があり RBSO の一定の収入になっている。

この中で 9 月 12 日（金）のワークショップが内容について、またエピソードとして大変面白かったので改めてここに記しておく。このワークショップはオーケストラや音楽産業に関係なく若手ビジネスリーダーを対象にした研修会の一つとして開催され、ハイドンの交響曲のリハーサルや演奏を通じて指揮者とオーケストラの関係からリーダーのコミュニケーションやリーダーシップ論を学ぶ目的で開催された。講師は指揮者であり彼がワークショップを進行し、指揮者と楽団員があるいは楽団員同士が言葉を介して或いは言葉を介さずに演奏というゴールに向けてどのようにリードをするのか、フォローをするのかを解説して言った。楽団員は普段通りに演奏をするのだか、いつもと違うのは意図的に指揮者が指示を出さなかったり、反対に過剰な指示を与えたり、わざと他の演奏者を無視して演奏するなど制限を設けながらコミュニケーションに関する様々な環境を実験したことと、ワークショップの参加者が客席でなく、それぞれ演奏者の横に座り楽団員や指揮者の目線でオーケストラの演奏を体験したことである。これらの演奏の結果の違いや随時行われる楽団員へのインタビューを通じて参加者はリーダー論を学ぶのである。指揮者という取りあえずは絶対なリーダーがいて、かつ個々の専門家の集団で構成されるオーケストラ芸術の特徴を取り出したものであり、オーケストラが提供できる新しい価値、つまり商品としてこれから日本でも応用できるワークショップではないかと思う。もう 1 点言わなければいけないことがある。このワークショップ、以前から開催が予定されてはいたものの、実施については保留になっておりオーケストラ側の制作は中断していた。なんと正式に開催が決定され、担当者に制作を進めるように連絡が来たのは本番日前日 9 月 11 日の 20:00 だった。ちょうど、その担当者と私は連絡があった時に Bangkok Festival のオペラ公演「トゥーランドット」を鑑賞しており、その幕間に連絡を受けたのだった。彼女は少しは慌てたものの、落ち着いてそのオペラを最後まで鑑賞し、そこから楽団員との連絡に使っている LINE を最大限に活用し、その日のうちにコンサートマスターだけは手配し、普通なら楽団員の手配が終わるまで「誰も寝てはならぬ」となるところが、その日はゆっくりと寝たらしく、よく朝一番に他の楽団員を手配し始め、ハイドンの交響曲に演奏に必要な楽団員 25 名を当日リハーサルの始まる 12:30 までに全員集めて、何事もなかったかのようにリハーサルが進んだのである。当の楽団員もリハーサル後、本番の前に主催者から提供されたホテルのビュッフェを食べながら「朝に連絡が来たよね。ハハハ。ところでこのご飯旨

いね。」という感じで落ち着いて対応していた。私は本当に彼らの対応能力の高さに驚くとともに、丁寧な準備が全てにおいて正しいと思い込んでいる自分を心から恥じた瞬間でもあった。

ビジネスリーダーワークショップの様子

※ワークショップ参加者が楽団員の間に入っているのが分かる

IV. RBSO 事務局

① 事務局とのミーティングについて

滞在中に私と RBSO 事務局とで何回かミーティングを実施、また事務局の仕事を視察するため公演の打ち合わせにも参加した。まずは 8 月 13 日に 9 月 28 日に行われるパーティーの下見と打ち合わせのためにオリエンタルホテルに事務局のパーム氏とともに出かけた。普段は細かいことは気にしない彼らがかなり綿密に打ち合わせをしており、その後パーム氏に確認したところ「我々は特に Royal の名が付いてからは、Royal の名を汚すことになるので、今まで以上にミスが許されない、評判を気にする。」と言っていて納得をした。またミーティング全体を通しては以下のような課題や意見が交わされた。彼らの現状を反映した内容だと思うので私が彼らに伝えた意見とともにまとめておく。

課題	RBSO	柿塚の意見、コメント
楽団員の雇用について	演奏の安定化のためにフルタイムの雇用にしたいが、そのための資金が不足している。これまで以上にスポンサーに対してフルタイムで楽団員を雇用できるように説得していく。一方、それはすぐには実現しないので、公演前に個々に楽団員に依頼、募集をしているところを、大きな演奏会については年間で通してスケジュールを示し、包括契約を進めたい。	楽団員が他の楽団や大学に所属しており、フルタイムの雇用をしないでも済んでいることは RBSO の強みでもある。それは柔軟な運営が可能という意味だから無理にフルタイムの雇用をする必要はないのではないか。年間を通じた包括契約は楽団員にも事務局にとっても、いいことなのですぐにでもした方がよい。

コンサート、リハーサル会場について	専用のコンサートホールができる予定で完成予想図まで公開されたが、その計画が取り消された。これまでと同じくリハーサルはチュラロンコン大学、コンサートはタイ文化センターで実施する。	特になし
スポンサーについて	①Royal とついてはいるが王室からの直接的な経済的支援はなし。Royal 名乗るから支援をしてくれる民間企業があるのは事実。 ②寄付全般についてタイは仏教の影響、輪廻転生の考え方からお布施や、社会的な課題への支援は比較的積極的であるがそれは教育、福祉などが対象であり、オーケストラは恵まれた芸術だという認識で人々の意識の中で対象外。 ③政府からの直接的な支援はなし。継続して支援を求めていく。	欧米が主導で近年は日本でも関心が高まりつつあるが、オーケストラが教育、福祉、コミュニティなど社会的な課題に取り組み、その成果が注目され、その点が評価されることもある。基本的にオーケストラや音楽はその課題に対応する能力を持っている。そうすればタイ社会でも受け入れられるのではないか。日本センチュリー響やバンコクのエマニュエル・オーケストラの例をあげ説明。同時に王室や政府との関係もあることから日本のように、あるいはタイの非営利組織のように自由にやれる訳ではないということも事実。
楽団員オーディションについて	音楽監督ミッシェル・テルキンのもとオーディションを進めている。オーディションの結果、若い優秀な楽団員が入団する一方で、ベテランの奏者にはこれまでのように演奏機会が与えられないことがある。 ※（柿塚注）フルタイムでの契約ではないので、オーディション合格者が出演依頼のための音楽家リストでの優先順位が上がる。リストの一番上に名前が挙がるということ。	フルタイム雇用でない強みを生かし、様々な演奏やイベントの機会を柔軟に提供する方法がある。それはベテランの奏者の経験や技術を発揮する機会にもなり、RBSO の活動の多様さに波及すると思う。
事務局スタッフの育成	①現時点でジェネラル・マネージャーのワンチャイ氏に過重に業務が集中しており、年齢も 50 代中盤であるので若手事務局スタッフの育成が必要である。 ②ライブラリアンやステージ・マネージャーの不足や不在。現在、ライブラリア	①パーム氏は年齢も若いし、感覚も鋭く、大学ではコントラバス専攻ではあるもののクラシック音楽マニアではないので、これからの時代の事務局スタッフとして適任だと思う。 ②日本のやり方を必ずしも真似する必要

	ンは非常勤、ステージ・マネージャーは専門的にはおらず、数名で手分けして担当。	はないと思う。参考にはしてもいいと思うがタイの感覚やビジネスの習慣を大事にして国際的に問題のないレベルでRBSO のやり方を創った方が早いと思う。
日本のコンテンツ	タイ人にとって日本は人気のある旅行先であり、日本のコンテンツも人気が高い。日本のゲームやアニメをテーマにしたコンサートを聴衆の拡大のためにも開催したいが権利関係や契約も含めてどうしたらよいか。	条件がそろえばいくつかの方法を提案できる。実際にやりたい内容（コンテンツ、対象者、出演者など）細かくヒアリングし、現在仲介を進めている。

② 音楽教室 RBSS School について

RBSO 事務局は 1996 年より音楽教室 RBSS School を運営している。現在は事務局と同じビル内に教室を構え RBSO 楽団員が講師を務めている。プロのオーケストラが直接音楽教室を経営している例は他に聞いたことはないが、音楽教育に自ら関わっている点はオーケストラの運営上も聴衆の拡大や楽団員の雇用について活用できるコンテンツだと思う。

③ SNS の活用について

対外的には Facebook を活用しコンサート告知や曲目解説など動画を使い積極的な広報活動を行っている。またスポンサーにタイ国政府観光庁 amazing Thailand がついていることもあり指揮者やソリストをタイの観光地やショッピングセンターへ招待し、その様子を映像にして Facebook にて配信している（The Great Artist Visit Bangkok）。私自身も日本人指揮者の川本貢司氏の撮影に一部同行した。観光立国でもあるタイらしいユニークな活動で、同じ文化活動でも文化財やエンターテイメントと比べ観光に貢献しにくいオーケストラ芸術ができる方法として外国人出演者を観光アンバサダーにすることは面白い活動だと思う。また対内的には事務局員と楽団員の連絡には LINE を使い、9 割の楽団員がそれを使用しているということで、社会や組織が健全に成長するには新しい機能や仕組みについて慎重になり過ぎないということが大事であると再認識した。

音楽家によるタイの観光地紹介
The Great Artist Visit Bangkok
※指揮者、川本貢司氏の回

V.　タイ国立交響楽団（NSO）、タイ・ユースオーケストラ（TYO）他

実はバンコク訪問直前までその存在を知らなかったのだがタイ政府には文化省の一部署である文化振興局直営のプロフェッショナルオーケストラとして国立交響楽団（NSO）があり、さらに若手音楽家育成を目的としたユース・オーケストラ（TYO）が存在する。これらの活動について以下のコンサートとそのリハーサルを視察した。

日程	会場	公演名	指揮者	プログラム
8月20日（火）	Satree Samut Prakan School	タイ国立交響楽団　School Concert	楽団員	タイポップ
8月24日（土）	タイ文化センター　メインホール	タイ・ユースオーケストラコンサート	Paye Srinarong	ファリャ：「恋は魔術師」～火祭りの踊り サラサーテ：チゴイネルワイゼン ガーシュイン：ラプソディー・イン・ブルー リムスキー＝コルサコフ：交響組曲「シェヘラザード」
8月30日（金）	Rajini School	タイ国立交響楽団　School Concert	楽団員	クラシック名曲、ミュージカルナンバー、映画音楽など
9月7日（土）	国立劇場	タイ国立交響楽団　Classical in Touch	Vanich Potavanich	チャイコフスキー：「エフゲニー・オネーギン」よりポロネーズ シベリウス：フルート（ヴァイオリン）協奏曲ニ短調 リムスキー＝コルサコフ：交響組曲「シェヘラザード」

文化省文化振興局の直営であるのでNSOの楽団員は国家公務員であり月給制のフルタイム勤務、公的年金・保険の適用があり、原則定年まで雇用される。その公的な性格から上記のように学校でのスクールコンサートやタイ国民が広く親しめるようにタイ民謡やタイポップのコンサートを行っており、純粋なクラシック音楽のコンサートは年間 6 回と比較的少ない。また楽団員はTYOの若手音楽家の指導や一部スタッフも担っている。その事務所兼練習場は国立劇場に隣接している。実は NSO の楽団員の大多数が RBSO の楽団員でもあり、その楽団長も RBSO でヴィオラ奏者として活躍している。また 9 月 7 日のコンサートで指揮をした Vanich Potavanich 氏は RBSO のトランペット奏者でもある。なお器楽奏者だけでなく歌手も所属している。

このNSOによる8月20日のSatree Samut Prakan Schoolという公立学校（日本の中学校に該当）が特に面白かった。この公演は学校の体育館に舞台と客席をつくり全校生徒が聞くという日本でもよく見るスクールコンサートなのだが、おおよそ 2 時間の公演で 1 曲もクラシック作品は演奏せずロック、ミュージカルナンバー、タイポップで占められていた。しかも学校の先生が（校長まで！）代わる代わるオーケストラをバックに歌ったり、NSO の歌手陣が黄色い声を上げて客席を盛り上げたり、生徒が踊りだすなどライブハウスのような盛り上がりなった。そしてその盛り上がりが最高潮に達した時に会場の照明が落とされ、なんと学生がスマートフォンのライト機能を使い、ペンライトのように頭の上で振りだしたのである。まるで人気ポップス歌手のライブのようなコンサートで今まで聞いたどのオーケストラコンサートでも経験したことのない盛り上がりだった。NSO にこのような構成にしている理由を尋ねたところ「クラシックを演奏しても学生は聞かない、興味

を持たない。それであればエンターテインメントを追求する」とのこと。この割り切り、そしてクラシック音楽やオーケストラを扱う際に、自分たちのスタイルに合わせることに躊躇がない、それらを過度に重要視し過ぎないこの姿勢はこの後もタイの音楽家や音楽関係者に共通して感じられたことであり、彼らがクラシック音楽を消化し、西洋からの借り物でなく自分たちの文化として発展させる基本になると感じる。なお 8 月 24 日の TYO のコンサートでもプログラム後のアンコールで一転して若い音楽家が指揮者とともに踊りながら演奏しており、同じことを感じた。

この NSO および TYO 以外にタイには陸海空軍それぞれにオーケストラがあり、また警察にもオーケストラがあるためバンコクにはかなりの数のプロフェッショナルオーケストラがあることになる。これらのオーケストラ楽団員も一部 RBSO 楽団員として登録している。

NSO 専用の練習場

NSO School コンサート

※スマートフォンをペンライトのように振って

VI. タイ・フィルハーモニック管弦楽団（TPO）、マヒドン大学

RBSO とともに日本でも、もう一つのバンコクのオーケストラとして知られるタイ・フィルハーモニック管弦楽団（TPO）のコンサート、リハーサル及びその母体であるマヒドン大学音楽学部も視察した。視察したコンサートは以下の通り。

※9 月 13 日、14 日については帰国後のコンサートのためリハーサルのみ視察。

日程	会場	公演名	指揮者	ソリスト	プログラム
8月10日(土))	プリンス・マヒドンホール	15th Thailand International Composition Festival 2019	Kyle Wiley Pickett	N/A	Narong PRANGCHAROEN Raging Fire for Orchestra Deqing WEN Variations of a Rose Xiaogang YE The Backyard of The Village CHINARY Ung Grand Spiral for Orchestra Melinda WAGNER Proceed, Moon: Fantasy for Orchestra
8月17日(日)	プリンス・マヒドンホール	Turkish Delight	Johannes Klumpp	ヴァイオリン、Friedemann Eichhorn	タイ伝統曲：アブ・ハッサン ファジル・サイ：ヴァイオリン協奏曲「ハーレムの千一夜」 プロコフィエフ：交響曲第5番変ロ長調
9月13日(金)、14日(土)	プリンス・マヒドンホール	Echoes of The Warcry	Alfonso Scarano	N/A	Narong PRANGCHAROEN：セレブレーション（世界初演） モーツァルト：交響曲第38番ニ長調「プラハ」 ショスタコーヴィチ：交響曲第7番ハ長調「レニングラード」

TPO は 2005 年に活動を開始した 3 管 14 型 83 名の楽団員を抱える大オーケストラであり楽団員はその母体である国立マヒドン大学音楽学部の教授、講師を兼任するもの、また楽団単独で契約するもの、いずれにしてもフルタイムの雇用である。大学が運営しているが学生のオーケストラではなく、プロフェッショナルな楽団である。原則、タイ国籍またはタイに一定以上居住するもののみに楽団員の門戸を開いている RBSO とは違い、タイ人の他にもアメリカ、カナダ、ドイツ、ギリシャ、中国、日本など多国籍な楽団員で構成されている。またプログラムについても上記のようにクラシック、近現代の名作から新作世界初演、タイの作曲家の作品なども取り上げ国際的水準に合致した内容であり、その演奏水準を見ればタイでもっとも技術的なレベルの高い楽団である。

プリンス・マヒドンホール
での TPO

TPO を運営するマヒドン大学音楽学部には日本人の安藤博氏が客員教授として勤務しており、彼から TPO の様子を聞いたり、マヒドン大学のキャンパスを紹介いただいた。マヒドン大学はバンコク郊外（実際にはバンコクでなくナコーンパトム県）に位置しており市街地からは遠い一方、広く新しいキャンパスを有している。同じ国立大学である名門チュラロンコン大学に並ぶ水準に迫っており、何人かの音楽家から既に音楽学部ではタイで一番の水準ではないかとも聞いた。また世界各国の音楽大学と連携を進めたり、英語による全寮制のプレ・カレッジが校内にあるなど国際的な大学であり、TPO もその特徴を色濃く反映している。一見すると音楽家の雇用も安定しており、演奏水準も高いことから順調なオーケストラであるように見えるが安藤氏や TPO 楽団員の会話から、また私自身がそのコンサートを経験した経験から TPO の抱える問題点も聞くことができた。

- TPO の活動のほとんど全てがマヒドン大学内で完結しており、外部に開かれていない。メインコンサートの会場も大学構内のプリンス・マヒドンホールである。
- さらに上記のようにマヒドン大学はバンコク郊外にあり、バンコク市街地を走る鉄道の終点から更にシャトルバスに乗る必用がある。そのため慢性的な交通渋滞が問題になっているバンコクの市民にとって感覚的な距離はかなり遠い。
- その結果、聴衆が少なく、また固定化されている。

- それは財政面でも同じで大学からの資金に多くを頼っており、外部のスポンサーや支援者が少ないため、大学の方針次第でオーケストラの運営が左右される
- 3 管 14 型という大編成であることと、楽団員の出演契約内容の仕組みもあり、古典的な作品を演奏する機会が極端に少ない

しかしながら個々の楽団員の水準は高いので、環境が整いそのポテンシャルが今まで以上に発揮されれば、タイさらにはアジアのオーケストラ文化の中心の一つになることができるオーケストラだと思う。

VII. プリンセスガイヤーニヴァッタナー音楽院（PGVIM）での国際シンポジウム

バンコクにある音楽大学、プリンセスガイヤーニヴァッタナー音楽院（PRVIM）で 8 月 28 日（水）～30 日（金）に開催された国際シンポジウム「Music Matters A Celebration of the Sonic Experience」に参加した。その中でも特に印象に残ったタイの作曲家のアナン・ナルコン氏のプレゼンテーションとこのシンポジウム全体の感想について書きたい。

① アナン・ナルコン氏のプレゼンテーション Traewong

彼のプレゼンテーションはタイの民族的な要素を帯びたマーチングバンドの形態 Traewong についてだった。このバンド形態は西洋の楽器、クラリネット、トランペット、ユーフォニアム（バリトン）、スーザーフォン、スネアドラム、バスドラムにタイの民族打楽器を加えた独特な編成で構成される。独特なのは編成だけでなく、西洋楽器を使っていても明らかに西洋的な奏法と違っていたり、レパートリーも民謡調なもの、即興的なものが中心となっている。実際にバンドマスターであるクラリネット奏者に質問したところ彼は海軍の吹奏楽団でも演奏しているが、求められるものが違うので奏法から変えていると答えていた。彼らの主な活動場所は仏教的な行事であったり、結婚式、葬式など地域のコミュニティをベースとしている。それらの機会は時にコミュニティ住民を刺激するものでもあるので興奮が最高潮に達した際には、その興奮が暴動に発展することもあり楽器の演奏技術以外に護身術が必要なほどらしい。ユニークなことはその成り立ちからしてそうで、タイ近代化の過程で軍隊の西洋化、近代化に合わせて軍楽隊の編成や運用も必然的に併せて輸入したのだが、それが軍楽隊の中だけに留まらず、民謡などと融合しながらタイの庶民にも流行し、このバンドが生まれたという歴史がある。一方でコミュニティの解体とともにこの Traewong も次第に活動の機会が失われているということだった。しかし、このユニークな西洋のものとも、タイの正当な伝統とも違うオリジナルの音楽は、先の NSO のスクールコンサートでも触れたように、タイの音楽家の西洋音楽に対するいい意味でのおおらかさ、西洋音楽に対するコンプレックスの少なさを体現しており、本当に彼らの音楽に対するアイデンティティの強さを感じることができ、本当に感心し、羨ましいとも思った。この点についてアナン氏と PGVIM 教授のアノタイ氏にも質問をぶつけてみた。する

と「これがタイ流」「河の水のように境目がなく、すべてが交じり合う文化」と確かに彼らもそのことを何となく認識しているが、一方、その理由を明確に説明することはできないようで、現時点では自然と身についている態度としか言いようがない。

Traewong についてプレゼンテーションするアナン氏

② 国際シンポジウム全体を通して

このシンポジウム全体を通して驚いたことがシンポジウムでの共通言語が英語であり、そこには一切通訳が入らなかったことである。各ゲストスピーカーはもちろんのこと、学部生が発表する短いプレゼンテーションでも質疑応答含め全て通訳なしで行われていた。また開会式や様々なゲストが演奏をするショウケースの司会進行も学生に任されており、意識的に英語を使った教育をしているようである。彼らは今も、今後もダイレクトに世界中の同業者とコミュニケーションを取りつつ自らの音楽文化を創っていくことが想像できる。当然、首都バンコクの大学生以上というのはタイ全体で見れば一握りの人口ではあるのだが、どうしても我が国の状況と比較した時に、今後我々がアジア各国のオーケストラや音楽家とプロジェクトをする際に日本人が最も言葉の問題を抱えているという状況に成りかねないという危機感を改めて感じた。

VIII. クロントイのエマニュエル・オーケストラ

バンコク市街地にクロントイ（クローントゥーイ）という地域がある。ご存じの方もいると思うがバンコクの中心地の目の鼻の先に位置するタイ最大のスラムであり約 100,000 人が居住すると言われている。ここで地域に住む子どもたちとオーケストラ活動をしているエマニュエル・オーケストラを 9 月 6 日と 8 日に訪ねた。この活動については渡航前には全く知らなかったのだが、同地域でギターやドラム、キーボードを使って子どもたちとバンド活動をしている Music Sharing から紹介してもらったのだ。

ベネズエラの青少年のためのオーケストラ「エル・システマ」に影響を受け、1990 年代後半にノルウェー人の宣教師によって設立された団体で、現在は Music for Life Foundation という非営利団体が運営をしている。クロントイ地域にある教会エマニュエル・ルーテル教会を活動（練習）場所としており事務所も教会と同じ建物に入っている。

目的は多く分けて 3 つ。まず「スラムに住み一歩外に出ると、時には家庭内でさえ暴力や薬物、犯罪の危険が身近にある子どもたちに、それらとは違った環境や目標を与えること。」、次に「音楽を通じてスラムの外の世界を知り、接点を持ち、スラムの外で暮らす可能性を示すこと。」、最後に「音楽が彼らのスキルとなり、何かしらの仕事につながること。」である。

演奏レベルや経験年数に応じて A から D までの 4 つのクラスに分かれており、私は A と C のオーケストラと別に結成された合唱隊を見ることができた。オーケストラの指揮、指導にあたるのは音楽監督でバンコク以外にイギリスでも活動する指揮者 Jonathan Mann とこのクロントイで生まれ育った Warin Artvilai 氏（通称トン君）で、彼もまた、このエマニュエル・オーケストラでヴァイオリンに出会い、その後も音楽を続け、このオーケストラから奨学金を得てマヒドン大学を卒業し指導者としてこのオーケストラに帰ってきた。この時、オーケストラはちょうど 11 月に香港で開催される音楽教育のカンファレンスでの発表のため、合唱隊は 9 月 12 日の Bangkok Festival でのオペラ「トゥーランドット」での児童合唱出演のために練習していた。それ以外に通常は教会でのコンサートやスラムの広場でのお披露目のコンサートなどを行っている。

彼らの活動は主に民間や個人からの寄付金で成り立っており、その額は潤沢とは言えないが困るほどに足りないことはないと言う。これは同地域で活動する Music Sharing も同じような状況で社会的に弱い立場のものに対するタイの寄付、お布施は文化、慣習として成り立っており、RBSO などの一般的な芸術団体が寄付金の獲得が課題であることとは反対だ。一方で彼らの活動は政府、行政からの支援はなく、これは微妙な問題であるのだが、クロントイの再開発問題があり、彼らと政府の関係は、具体的に問題が起きているのでは

ないが、彼らの言葉の端々から良好とは言いにくいと感じた。再開発に伴い、住人の立ち退きが必要な訳だが、それは単に住宅の問題だけでなく、仕事の問題やコミュニティの維持の問題が起こるので、彼らが簡単に受け入れることはできないということだった。

最後にトン君の案内でクロントイのスラムの中を案内してもらい、トン君の実家の食堂や高速道路高架下のオーケストラが演奏をお披露目する広場を見て回った。確かに彼らの住居であるドブ川沿いの粗末な家や質素な公営住宅とすぐ目の前にそびえるスクンビット地区の高層ビルにバンコクの格差社会を痛いほど感じた。

エマニュエル・オーケストラのリハーサル

※指揮をするのが Warin Artvilai 氏（トン君）。奥にいる女の子はアイスクリームを頬張っている。

クロントイ地区の高速道路高架下の食堂

※住宅や広場に隣接している。

4.　フェローシップ活動を終えて

これまで日本のオーケストラがアジア諸国のオーケストラと接する時に話題になるのは、「日本が何を提供できるか」という議論が中心にあると感じている。しかし今回フェローシップ活動を終えて、それは実はうすうす気づいていたことでもあり、それフェローシップを申請した理由でもあるのだが、これからは「彼らから何を吸収するか」「彼らと何を交換するか」に早急にシフトするべきだと感じた。確かに MNSO の楽団員の技術は発展途上である、タイ・バンコクにおいてもずば抜けて素晴らしい音楽家もたくさんいるが平均的な技術は未だに日本の方が高いかもしれない。しかし、それは大した問題ではないというのが私の意見だ。特にタイ・バンコクにおいては音楽を学ぶ環境も姿勢も整っており、技術が追いつくのも時間の問題だろう。ミャンマーにおいても今の MNSO のメンバーが活動を続ければ、その間に次の世代が育ち、次の段階に進むだろう。今はインターネットがあり最新の情報が文字だけでなく音や映像で入手できる。我々は音楽をやっているので文字情報でなく音、映像から学ぶことができればその成長は格段に早くまた健全なものになる。これはマネジメント、事務局の仕事においても同じだろう。日本での一般的なやり方を伝

えても仕方がない。彼らは文化もビジネスの習慣も我々とは違うのだから。そして彼らが音楽を提供する相手、パートナーとなる協力者のほとんどは我々日本人でなく、彼らと同じ文化、習慣で育った自国民なのだから。彼らが学ぶべきは日本の同業者ではなく自国で、あるいは世界的に成功している他の業種であるべきだ。では我々は彼らと何ができるだろう。それは「対等な関係で共に音楽をする」ことだろう。実際、私は MNSO のリハーサルをする山本氏、小山氏を見てそう思った。粘り強く、時にはしつこくリハーサルを繰り返すが、瞬間、瞬間に聞こえるオーケストラの美しい音を楽しんでいたからだ。技術的に考えれば日本で指揮をしていれば、もっと美しい音に接しているはずである。しかしそうではなく、この場で音楽を共有して、そこで生まれる美しさを楽しんでいるのだ。もしそこから MNSO の楽団員が学ぶのなら勝手に学ぶだろう。山本氏や小山氏が見ているのは指導をする対象としての生徒ではなく、一緒に目指したい音楽なのだ。そして MNSO の楽団員にも同じことを求めているだろう。

同時に彼らから学ぶことがあり、それは自分自身の to Do リストにもなり得るので明確にするために箇条書きで記しておきたい。

- 西洋音楽に対する柔軟で自然な態度、そこからの自国のオーケストラとしてのアイデンティティ
- 我々が良いと信じているやり方が常にベストだとは限らないこと
- 共通言語としての英語
- デジタルデバイスの有効利用（組織内、組織外ともに対して）

とは言えオーケストラだけを見た時に、彼らがそのポテンシャルをうまく使いきっているとは思えない。それは現時点では彼らには必要でないだけかもしれないし、必要なことに気付いていないのかもしれない。しかしオーケストラは常に社会に合わせて変化をして生き残ってきた（氷河期の恐竜のように変化をしなかったものが残らなかっただけかもしれないが。）。だから 16 世紀のヴェネチアのオーケストラと 20 世紀のニューヨークのオーケストラと 21 世紀のバンコクのオーケストラは同じようにオーケストラと呼んでも全然違う。それが当たり前なのだ。なので、我々はミャンマーやバンコクの仲間たちが、自分たちのオーケストラのやり方をやればいいんだ、自分たちの文化や社会に向き合えばいいんだと気付き、それを堂々と行えるように、同じように堂々と我々の社会に目を向けてオーケストラ活動を進めていけばいいのだと思う。そしてそれを時々お互いに交換し集積できるような状況をつくり 21 世紀のアジアのオーケストラの存在価値を積み上げていければいいと思っている。我々は実演団体なので、そのような状況は活動を通じてしか気付いたり、実現できたりしない。そのために実際に音楽家が交流を図りそれぞれの社会や地域コミュニティと影響しながら表現活動をするようなプロジェクトを今後進めていきたい。